渇語り（二十七）

文・小西一三
絵・小西由紀子

九十五年間、生きてきて その2

中羽立の菅生サンさん（九十五）は明治四十三年四月生まれ。今は近所の児童館の鍵の管理を任され、毎日弁当を持って通うという元気なおばあちゃんです。十八歳で大崎から中羽立に嫁入りし、戦前にはカラフトにも住んだことがあるというサンさんに、戦後の話をお聞きしました。

リヤカーを引いて行商もしたなあ

カラフトは想像以上に住みやすい所だったども、夫が今度は福島の炭坑に行くことになって、終戦の年の五月に引き上げて来た。引き上げ船は新潟の港に入って、そこから汽車に乗って大崎の実家に帰ってきたのよ。終戦のあの玉音放送は近所のラジオのある家に集まって聞いた。男だぢだば、泣きながら聞いていだっけなあ。

戦後も子どもたちを育てて生活するため、一生懸命に働いた。最初の頃は夫が汽車に乗って秋田までものを仕入れに行って、それを私がリヤカーに積んで売り歩いたもんだよ。当時、この一帯は畑が少なくてな。大根、ゴボウ、サツマイモなど、野菜類を多く売ったもんだ。田はあるども畑のない家でだば、お金の代わりに米でも払ったもんだよ。

夫が四十七歳で亡くなったので、それからは店の方に力を入れるようにしてな。小さい店だども、野菜に缶詰、紙にロウソク、線香、飴玉などなんでも置いた。まあ、田舎の雑貨屋だなあ。

そうそう、三月二十八日の塩口の祭、四月五日の中羽立の祭の前は店も忙しがった。砂糖をたっぷり使った鯛、海老、扇などお目出度い形をした祭用の菓子があってな、五個で一人前。私がその注文を貰っては配達して歩いたのよ。今だば甘いものが嫌われる時代だども、当時は甘いものなの、そうめったに口に入らねがったから、注文はあったもんだよ。

男だぢは酒を飲み過ぎてフラフラになって歩いて堰っこに落ちるし、子どもたちは祭の菓子を持って走り回るし、本当に祭に活気があったもんだ。

私だば明治生まれだもの。いろんなごど見てきたなあ。